

## C-1 岩沼市寺島寺島地区

2011年12月21日(水)

---

報告者名	滝澤 克彦	被調査者生年	1927年(男)
調査者名	滝澤 克彦	被調査者属性	農業(以前は副業として電気屋)
補助調査者	兼城 糸絵		

---

### 話者について

農業をする傍ら、副業として60代頃までの23年間電気屋をしていた。50代の頃に区長代理を務めた経験あり。その他にも民生委員、農協幹事、交通指導員などを務めてきた。また、趣味で狩猟を50年ほどやってきた(キジ・ハト・カモなど)。息子が、亘理で整備工、農協の支部長や監事、消防団長なども務めている。

### 部落の概要と社会組織

大字寺島には寺島・蒲崎・新浜という3つの部落があり、それぞれに契約会がある。公会堂もそれぞれ別にもっている。行政区の蒲崎はさらに北と南に分かれるため、区長は蒲崎に2人、寺島と新浜にそれぞれ1人ずつとなる。各地区の役員が集まる大字寺島全体の役員会が年2回開催される。かつては玉浦小学校の寺島分校があったが、児童数が少なくなったため廃校となり、送迎バスで玉浦小学校へ通っている。

部落としての寺島では町内会長、区長、日月堂総代を同一人物が兼ねている。「町内会」は「契約会」の新しい呼び方で、中身は同じである。町内会の集まりは2月第1日曜日に開催され、「総会」と呼ばれている。

青年会がありかつてはバレーボールや野球を行っていたが、最近ではほとんど活動していない。消防団は第11部隊、番立てで団長を務める。

葬式の組は寺島部落内でカミ、ナカ、シモに分かれており、話者宅はシモにあたる。その組に対する呼び名は特にない。葬式の祭には、キメシとホリマイという役割があり、キメシは死者が出た時に各家庭に知らせに回る係で、ホリマイとは遺体を埋める穴を掘る係である。もっとも、現在は火葬なので、ホリマイは墓石を動かす役目を担っている。キメシは死者が何月何日に亡くなったということと、葬儀の日程について一軒一軒まわって告知すると同時に、線香代として20円を徴収している。キメシとホリマイは年に1度の総会の時に区長が管理する台帳をもとに決められる。キメシは1人で、ホリマイは2人。ホリマイにはバールや手ぬぐい、スコップなども与えられる。5~6年前までは、自宅で葬儀を行っていた。最近はほとんど岩沼にある会館で行っており、津波の後は特に会館(岩沼と名取)で葬儀をするようになった。しかし、シラセなどは以前と同様に行う。仮設住宅に住んでいる場合はまだいいが、仮設を出てマンションなどに身を移した人に連絡をするのが少し大変である。一応電話で連絡している。

## 日月堂

大字寺島のなかでも寺島部落は日月堂、蒲崎と新浜は湊神社を祀っている。日月堂の拝殿が震災により倒壊してしまったのでいまでは解体してしまった。また、鳥居と旗竿があったが地震（振動）により壊れてしまった。祭神は日天月天であるといい、八幡旗が昔あったのでそれがご神体だったのでないかと思う。



写真 拝殿が倒壊した日月堂

日月堂の祭日は9月8日、餅をついたり、おこわを炊いたりして食べる。神楽などは特に行っていない。これまで2、3回頼んで早股から神楽に来て貰った記憶がある。岩沼の竹駒寺の住職が別当を務めている。別当は今年も祭を行って欲しいという考えであったが、住民側がこんな状況では無理であると主張し、行わないこととなった。

現在は鏡が置かれている。本殿の脇に天神があり、そこに子ども神輿がある。子ども神輿は子ども会が参加単位となって行われたが、これは祭りとは別に行う行事であり、毎年3月頃に行う。もともとは男児だけで担いでいたが、今では女兒も担ぐ。今年は地震の前にしたようなしていないような、記憶が少し曖昧である。

## 講

コバハラサンへの代参講が30~40年前ぐらいまではあった。1か月にいくらか決まった金額を積み立てる。その他に月山参りなどもした。女性だけで信心する山の神があり、小牛田の山神社に行き、安産祈願などを行う。これは現在でも行われている。

## 寺院

寺島部落は、ほとんどが高林寺の檀家であり、うち23軒ほどが専光寺にハカショをもっている。ハカショとは、専光寺に墓をもっているということだけであって、檀那寺は高林寺ということになる。

## 部落のお祭

3月1日と11月の何日かに祭がある。それぞれの家庭で行う。エンナカの人たちが皆やってきて、魚料理や御馳走を作って楽しむ。これは村落単位ではなく、各家庭それぞれが行うものである。かつては旧暦で行っていたが、今は新暦で行う。

## 被災状況

大字寺島のうち、蒲崎は震災前に大体128軒ぐらいあり、そのうち60~70軒が津波によって流された。50軒は解体され、13軒が残っただけである。新浜は30軒ぐらいあったが、現在

もとの家に住んでいるのは2軒のみ。寺島は死者を出さなかったが、蒲崎と新浜はそれぞれ10数人亡くなった。寺島地区の42、3世帯のうち半数が仮設に入っている。

地震直後、寺島では、消防団長を努めていた話者の息子を含め消防団が中心となって避難を促していた。話者は、阿武隈川の堤防に上って津波の難を逃れることができた。見たことも無い大きな波が襲ってきて本当に恐ろしかったという。辺りは瓦礫が6尺の高さで積み上がり、家も1階部分が浸水し瓦礫などでめちゃくちゃな状態になっていた。母屋の建物自体は持ちこたえたものの、海側の作業場は全壊した。ボランティアの人たちに自宅のガレキや床下のノロ（泥）をかきだしてもらった。ボランティアの人たちには本当に感謝している。

壁を張り替え、箆笥を取り出して塗り直し、ふすまのガラスを付け直し、床を張り換え、もう一度住める状態になった。最近になってやっと住み始めた。農機具や車も水につかって壊れた。買って500kmも走っていない車が流された。避難時には、その車を取りに戻ろうとしたが止められた。息子が農機具の一級整備工だったので、農機具の修理をしてくれた。

南浜中央病院は2階ぐらまで水に浸かっていた。そこでは1,000人ぐらいの人（看護師と入院患者）が残っていて、看護師が1人と売店の人2人が亡くなったようだ。1,000人分の食糧支援を求められた。仙台の富沢の知り合いのところから買ってきた米で300人分のおにぎりを作ってもっていったら、1つのおにぎりを3人で分け合って食べていたらしい。おにぎりをもって行くときには船を漕いで行った。